

第十二話 無限への息吹き

先日は、レオナルド・ダ・ヴィンチのお話をしましたので、今週は、そのついでに、少し「芸術」というものに就いて考えてみたいと思います。

一昨年十一月、私は約七カ月にわたる欧米の旅を終えて、米国のロスアンジェルスからブレンデン・クリーヴランドの船客となり、日本に向けて二週間の船旅につきました。七カ月のあわただしい旅で十数カ国を駆け回り、毎日曜日どこかの教会で説教をしたり、講演をしたりしている間は、あまり気にもかからなかったのですが、いよいよ船に乗ることになり、二週間もすれば日本の土を踏むという時になって、日本の読物から、従って日本の思想界から遠ざかっていたこの七カ月のブランクが、今更のように、私をあわてさせました。で、私は、乗船間際になって、ロスアンジェルス^{ロサンゼルス}の日本街を走り回り、ここ、三、四カ月以来の古雑誌を買い求めました。そしてクリーヴランドのデッキ・チェアに寝をべって、それを貪り読むことになったのであります。ところがその中の、多分一昨年七月号の中央公論だったと覚えていたのですが、ある著名な作家

の「芸術は何のためにあるか」という一つの論文を発見しました。私は何気なく、その論文に目を通して始めましたが、読み進むほどに「これはとんでもない話だ。」と気づき、も一度始めから念を入れて読み返して見ました。が、何度読み返しても同じことで、その論文の言わんとするところは、判然としていて、疑う余地もありません。それは真に驚くべき暴論^{ばくろん}というのほかになく、私は、その論旨のあまりの言語道断さに、しばしがほどはぼうぜんとしたのです。ことわっておきますが、私は、その論文の著者に対してなんら含むところのあるものではありません。のみならず、その作家の作品、ことにエッセイのたぐいのものは真に興味深く読ませてもらっています。ことに氏の持つ近代的なパラドクスとギャグの楽しさには、いつもはおえまされているものです。けれども大文豪トルストイをあれほど悩ましめた「芸術論」ともなると、これは単なるギャグや思いつきなどで論ぜられるべきものではなく、もっと真剣な悩みをもって取り組まれなければならないもの、いわば、おとなの問題だと思えます。

ところで、同氏の論文は相当に長文ではありますが、同氏自身がそれをみごとに要約されていますので、今、それをそのまま取り上げてみましょう。

その論文で、その作家は「人間は性欲や食欲や、他人を押しのけて他人を従わせたい権力欲や、情緒の中に浸っていたい感情などを持っていて、それらの欲望を思うように味わいたいと常

に求めている。これらのエゴイズムとして一括されるもの、すなわち、人間の内部にある『悪』と言われるところの諸々の衝動が元来の純粋な人間なのである。」と断定します。が、「しかし、これらの衝動を、そのまま發揮させると、殺人、姦淫、独裁政治、肉体的破滅が生まれることを人間は知っているのだ」それらを押さえるものがなければならぬところから、私たちが「宗教、道徳、科学、法律などの名で呼んでいるところの文化体系の全体が生まれたのであるが、それらは人間の生活をより安全、より便利にするための手段にほかならない。」そこで、それらの手段があまり強く人間の本性を押さえつけると、その反動として、その文化のわくからのけ口を求め「これらの手段に対抗して、人間の生命の本来の力を主張するものが『芸術』なのである。」というのです。つまり、芸術とは、いわゆる、文化に対抗して、人間が人間の動物性を主張するところに生まれるものだという論旨であります。

私が、プレジデント・クリーヴランドのデッキ・チェアで、これを読んでいて、ほとんど叫び声をあげるばかりに驚いて思わず上半身を起こしたのは、ちょうど、そのとき、この論文の「芸術は何のためにあるか」という演題からの連想の結果でしょうか、思うともなく、私の頭の中で、数カ月前に訪れたイタリーの古い修道院にある美しい壁画を思い出していたからです。中部イタリーのフロレンスの、サヴォナローが住んだ都屋があるという年古りたサン・マルコ修道院の小

さな独房——独房なので三人も入れればいっぱいになる小さな石造りのへやですが、その独房の壁に、ほとんど無造作にと言っていいくらいの淡々たる筆致で——と言っても、実は手のこんだフレスコ画なのですが——一見、真に何気なく描かれたように見えるフラ・アンジェリコの壁画の前にたたずんだときの、あの感激を私は生涯かけて忘れはしないでしょう。

ああ、今でも思い出すだけで、心の底まで洗い清められるような、あの感動……。私は、たったひとりで、音もなくヒソソリと静まった、その独房の一つ一つを訪れながら、魂の奥底から、ゆすぶられるような激しい感動を覚えたのです。すでに五百年という年月が、画家と私との間を隔てているという事実は消え失せて、今、フラ・アンジェリコが話しかけているのです。いや、その描かれた絵そのものが描かれた当時のままに、五百年後の私に呼びかけているのです。私は、五百年前に生きたひとりの人間、フラ・アンジェリコの不滅の魂の息吹きをそこに感じたのでした。

という、皆様は、私がクリスチャンだから、それらの宗教画のもたらすふんい気に感動したのだからと言われるかも知れませんが、そうではないと、私は断言できます。同じくフロレンスのミューゼウムにあるミケランジェロのあの有名な青年ダヴィドの裸像の前に立ったときのあの感動も、私の終生忘れ得ぬ印象の一つであります。奥まった丸天井の円形部屋の中央に立つその裸

像……人間の身のおよそ二倍ほどの大きさの青年ダヴィッドが、これから巨人ゴリアデに立ち向かうとする緊張した瞬間の姿を捕えたミケランジェロの傑作です。身に一糸もまとわぬ、きわめてリアリスティックな裸身像ですが、私は、そのへやに一步足を踏み入れたとき、思わず、アッと声をあげました。圧倒されたのです。そのへや全体に充滿している生命を感じたのです。目には見えない、しかし、そのへやの隅から隅までを占領している巨匠ミケランジェロの魂の生命を感じたのです。すばらしい！私は全身がおののくような、しびれるような感動に包まれるのを感じたのです。皆様、それが「芸術」なのです。

「芸術はなんのためにあるか」という中央公論の一論文の論題から、私が、思うともなしに、そのときの感動を胸に呼び起こしていたとき、「文化というわくに押さえつけられた人間の動物性が、性欲とか食欲とか支配欲とかの悪と言われるものものの衝動が、そのわくに對して、はけ口を求めるのが芸術である」という、その論文を読んで、私がどんなに嘔然としたか、皆様には想像がおできになるでしょう。

いったい、その論文の作者は、一度でも、これらのほんとうの芸術作品の前に立ったことがあるのでしょうか？ なのにも遠く外国に名画を求めるまでもありません。日本の茶の湯の、あの幽玄な「わび」や、きびしい秩序の清潔な美を造形する日本の生花の高い精神性を、一度でも考えたこ

とがおありなのでしょう。日本が世界に誇る最高の芸術とも言われる、無表情な能面が、測々として見る人の心に忍び入る……たとえば、あの蟬丸のたえいるような衝動、のたたらす深い内面性に、一度でも触れたことがおありなのでしょう。不吉な運命の訪れに怯えつつ、それとの激しい精神的闘争とその勝利とを高らかに歌い上げた、ベートーヴェンの第五やブラームスの第一交響曲に、静かに聞き入ったことが、果たして一度でもおありなのでしょう。そして、それでもなお、「芸術とは理性に反抗する人間の動物的本能の産物である。」などと言われるのでしょうか？

いや、とんでもないことです。実は、あの論文には大きなまちがいがあります。それは、あの論文が「元来の純粋な人間」という言葉で呼んでいるところの「人間の本性」についての誤謬（ごめう）です。あの論文では「性欲や食欲や支配欲など、いわゆるエゴイズムとして一括されるもの、すなわち、人間の内部にある悪と言われるものものの衝動こそが、元来の純粋な人間」すなわち、そこそが人間の本性なのだとしていますが、実は、これは、そのまま、他のすべての動物に当てはまる特徴です。ですから「元来の純粋な人間」という言葉の代わりに、「動物の本性」と入れかえた方がよくわかります。つまり、こうなるでしょう。「性欲や食欲や支配欲など……人間の内部にある悪といわれるものものの衝動こそが、動物の本性なのである」と。

動物と全然異ならぬ動物性を持ちながら、しかも、天使のように天高く天翔けろうとする何物かを持っているのです。時間と空間とに縛られて生きながら、しかも、無限と永遠とにあこがれる何物かを内蔵しているのです。そう、それが人間というものなのですね。

皆様、今静かに皆様のお耳に流れ込んで来る美しいメロディをご存じでしょう。そうです。シェーベルトの「アヴェ・マリア」ですね。キリストの母マリアを……「めでたし恩寵に満ち溢れています君、世のありとある女のうちに、いとも祝福されています君……」とたたえる讃美のしらべです。人類の敬虔な魂たちが、二千年この方、口をそろえて叫び続けて来た一つの祈り「アヴェ・マリア!」……この言葉を、楽聖シェーベルトの若い魂が感動に震えつつ、美しく歌い上げたこのしらべ……なにか、ほのぼのとして、私たちの魂のふるさと思わせるような気がしないでしょうか。

どうやら、みちのくに、初秋の夜がふけて来たようです。では皆様、お元気で、また、来週!

だが、人間の本性とは、人間が他の動物と違っているところの根本をいうのです。そして、それをこそ「元来の純粋な人間の姿」と呼ばねばならないのでありまして、それは人間を動物から異ならしむところのもの、すなわち人間の精神性にあるのです。

押さえつけられているのは人間の動物性ではなくて、理性のわくの中にありながら、なおも力強くうごめいて、ともすれば人間を安易な動物的生活に結びつけようとするその動物性によって、今にも窒息しそうになっているのは人間のその精神性なのです。

けれども人間の精神は、……強靱で、崇高な人間精神は、押さえつけられようと、踏みつけられようと決して消え失せることはありません。人間の平凡な動物的生活の透間をねらっては、そのわくを打ち破って、無限の世界に羽ばたこうとする、永遠の彼岸に生き抜こうとするのです。この人間精神の無限へのあこがれ、永遠への思慕……ああ、それこそが、輝かしい芸術となつて、人間を、人里離れた幽玄の世界に運び行くのです。

この地上の三つの次元に縛られて、あくせくと、その動物的生活を営み続ける人間というものを、この次元を越えた「永遠」なるものに連ならしめるもの、「無限なるもの」に結びつけるもの、それが、それこそがほんとうの芸術なのであります。

先週のお話で、私は人間を複雑なものだと申しました。ほんとうに複雑なものなのです。他の